

最優秀賞 徳島県 丸岡様（20代 女性）

「知ちゃん、ちょっと ちょっと」小さい声で手招きをしながら祖母が私を呼びます。「何」と返事をしながら側へ行くと、「そこの引き出しにお年玉袋があるから、取ってくれるで」と頼まれます。今は7月。まだまだお正月までには何ヶ月もあります。78歳の祖母は、祖父と二人で暮らしています。遠くに嫁いだ子どもや近くにいる子ども達が一堂に集まるお正月をととても楽しみにしています。その時、孫や曾孫にお年玉を渡すことが祖母のお正月の大イベントになっています。私の祖母は、43歳という若さで脳梗塞になり、左半身が麻痺しています。若い時は、まだ杖をついて何とか歩いていたのですが、歳を重ねる毎に体が固まってきて、今は車いすの生活です。不自由な体ゆえに、いろいろな思いを心に抱え、たくさんの時間をかけてお年玉を用意してくれます。

その祖母の生活は、年金で賄われています。「もう少ししたら、お金が入るから、お父さんに言っておろしてきてもらうけん。」小さい頃は、何のお金が入るのかと疑問に思ったりしたのですが、大きくなり自分も年金を納めるようになって、祖母のお金の元は年金なのだとわかりました。祖母は、婚家が農業をしていたので農繁期は農業をし、農閑期には近所の家に縫製仕事をしに行っていたそうです。私の母を先頭に祖母には4人の子どもがいます。当時、祖父は、8人の家族を養っていたので、生活は厳しかったと思います。母は私に「おばあちゃん、よく年金を納めていたものじゃ。子どももたくさんいて、大変だったのに。無理してでもがんばって、年金を納めていたから、体が不自由になっても何とか生活が出来る。ありがたいよな。」そして、「知ちゃんも年金納めよるで」と聞きます。「年金を納める余裕がなければ、免除申請をしなさいよ。年金を納めることが出来るようになったら、後から免除してもらった分を払っていったらいいのだから手続きはきちんとしなさいよ。」と続けます。母は姉にも尋ねます。ある時、いつも適当に返事をしていた姉は、「年金を納めても、将来年金をもらえる保証がないのだから、納めなくてもいいんじゃない。保険を掛けていればいいと思う。」と母にいいました。年金を納めていたからこそ、祖母の生活の元が出来ているのだと感じている母は、年金の資格を取ること、今生活

に余裕がなければ免除申請をすること、10年以内であれば追納が可能なのだから生活に余裕が出来れば納めること、いつものように言います。そして、子どものいる姉には、「あなたにもしものことがあれば、遺族年金が子どもにもらえるし、体が不自由になれば障害年金をもらうことも出来るのだから納めるように。」この辺になると母親の威厳で姉に有無を言わせません。懇々と説得され、姉も国民年金に加入しました。

現在私は厚生年金ですが、今の職場に勤める前は臨時採用であったため、収入が少なく年金を納めることが出来ませんでした。母の薦めで免除申請をしていましたので、今の職場に採用されることになったと報告した時、母は、「仕事に慣れたら、追納するようにしなさいよ。年金が満額でもらえるようにがんばりなよ。」と、励ましてくれると共に、年金を納めることが出来るようになったことを喜びます。自分の老後より娘の老後を心配しているのでしょう。

現在の年金の仕組みは、いろいろな経済状態の人に適応した制度になっています。複雑な社会情勢の為、就職が出来ず生活が不安定な人や、低所得の為、年金を納めることができない人などいろいろな事情の人が増えてきています。そのような時には、年金事務所や市町村の役場などでどのようにしたらよいか相談することも将来の生活の為には大事なことだと思います。今までの年金の運用に問題があり、年金制度に疑問を持っている人が増えてきて、年金離れが社会的な問題になっている昨今、このまま年金を納めていても老後に年金を受け取ることが出来るのかと、時々私も不安になったりします。

でも、時代に適応した年金の運用や仕組みになるようみんなで考え、老後の心配がない安心した社会を作っていくことが私たち若い世代の役割だと思っています。そのために、これからも若い世代の義務として年金を納めていきたいと思っています。